

最強パーティーを作りたい

きーた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色々なキャラを組み合わせて自分だけの最強パーティーを作るゲームをプレイする少年のお話。

色々な原作のネタバレを含むので注意。

目次

ゲーム開始（ネタバレ要素、ポケモン、呪術廻戦）

1

ゲーム開始（ネタバレ要素、ポケモン、呪術廻戦）

「アクセススタート」

『ようこそ、アンリミテッドワールドへ』

ベッドに寝転んでそう呟くと、俺はシステム案内音声を聞きつつ意識を失う。

「……ん。ここがイチバンムラ、か」

数秒の無意識の後、目の前にのどかな村の風景が現れる。

視界の隅っこにあるのはハヤトという名前。俺自身が戦うことはないから、よくあるステータスなんかはない。

今やり始めたのは、二千二十五年の現在ではどこにでもある、フルダイブ型のRPGをベースにしたゲーム。特徴は、色々なアニメや漫画のキャラが、垣根を越えて登場するくらいだ。それなりに奥深くはあるらしくそこそこの人気は保っているらしい。

サービス自体は半年と少し。高校受験を終えてようやく参加できるようになったというので、俺もこうしてやって来たわけだ。

「最初は……ポケモンか」

システムメッセージに従って超田舎特有の、整備されていない道を歩いていくと、あんまり大きくはない研究所へと辿り着く。ポケモンの研究所って最初の町にあるやつは小さいからなあ。

そこをリスpektしてということだろう。

ちなみの中には誰もおらず、勝手に選んでもいい。まるで盗んでみるみたいだが、まあそんなに気にしなくていいだろう。

というか金、銀だとライバルが思いつきり盗んでるしな。

「御三家……どうするか」

埃っぽい机に無造作に放置してあるボールの山を見下ろし、呟く。ポケモンといえやはり御三家や伝説のポケモン……ではあるが、最初から後者が出ていては面白いわけがない。ポケモンたちと旅をして、終盤に捕まえるのが基本だし。

ともかく最初にもらえるのは火と水と草タイプのポケモン。

知名度からしても納得だ。

指示をきちんと聞いてくれるし。

進化して強くなるし、意志疎通がしにくいのを除けば完璧だ。

逃がすことだってできる。手持ちにできるキャラクターに制限はないから使う必要はほとんどないだろうけど。今更だがこのゲーム、基礎部分はポケモンを踏襲しているような感じだ。

様々なキャラクターを使役し、戦う。活かすも殺すもプレイヤー次第。

他のプレイヤーと戦い順位を競うのが基本の遊び方。もちろん緩やかに広い世界を旅する遊び方もあるが、メインコンテンツはあくまでも対人。

三ヶ月のシーズン制が採用されているのは、スポーツなんかに倣つてだろうか。大体のスポーツは一年周期だけどそれだと長いし、これくらいがいいんだろう。

話がそれたけどお陰で決まった。俺はヒノアラシを選ぶ。

「うおっ、眩しいな……」

ボールを持ちながら研究所の外に出ると、太陽が眩しいくらい輝いている。現在のゲーム内の天候設定は晴天だ。

快晴じゃないのでぽつりぽつりと雲があるが、概ね冒険日和。

「こつちか……」

現実味のある景色を横目に、村の外に出て道なりに進む。

安全地帯は基本的に村や町や特定のスポットのみらしい。

それと、明らかにレベル差がある場合はそもそも他のプレイヤーと戦闘ができない……これはまあ普通か。

ユーザーが減ったならともかくとして、勝率三割以下の対戦とか避けたいもんな。

「出てこいヒノアラシ」

ヘルプメニューを閉じ、トレーナーになりきったつもりでモンスターボールを投げる。もちろん出てきたのはヒノアラシ。

ひねずみポケモン。首の回りを覆う炎がカッコいいポケモンだ。

「ヒノアー！」

「可愛いなあやつぱり……おーよしよし……食べちやいたいぜ」
食べないけど。

頭を撫でつつヒノアラシを抱っこすると、愛くるしい声で鳴いてくれる。もちろんプレイヤー以外はAI技術の塊、結晶だ。

現実にくれたらいいのに。これは誰もが思うことだろう。

初期は可愛いけど最終的にバチクソイケメンになるのはあまりにも有名なのがヒノアラシだ。

「ん……エネミーエンカウトか……」

腕の中から飛び出したヒノアラシが炎をゆらゆら揺らめかせているので、俺も身構える。

ガサガサ揺れる草むら。

俺の腰ほどの高さもあるそこから飛び出してきた敵は……。

「ピキー」

ぷるるん青色ボディが魅惑的な、ドラクエシリーズのスライムだ。もちろん彼らにも様々な強さがあるが、初期の村で出てくるスライムなんてたかがしれてるだろう。

強いスライムが出てきたらそれこそ次の場所へ迎ええないし。

「ヒノアラシ、たいあたり」

「ヒノー！」

簡単な指示を出して二回ぶつとばしてやると、煙を出して消失した。

落とすのは確率のアイテムと金。金は確実に金額がランダムらしい。

八ゴールド落ちたので回収すると、手持ちにあった五百にプラスされる。

「ステータスはないけどポケモンは経験値で上がるから分かりやすいよな……早くマグマラシにしてあげたいぞ」

「ヒノー」

草むらを歩いて次の町へ……行きたいが、どんなモンスターがいるかチェックしたいので戦闘続行だ。

何度か右往左往して、開けた場所でエネミーエンカウトが発生し

た。

「なんじや人間よ、儂の顔に何か付いとるか？」

「えー……」

現れたのは富士山のような頭の形をした特級呪霊、漏湖だ。

もちろんあんな化け物が最初の村に出てくるわけがない。

そんなわけで、出てきたのは頭だけだ。

五条先生に身体を消し飛ばされた状態だからまあ何もできないのか……コイキング状態。一部の敵はこうして弱体化して出てくることがあるのはバトルを楽しまないライト層向けのためだ。

決してネタ枠ではなく、救済措置扱い。もちろんこの状態から成長……というか回復？ させることもできるのは言うまでもないだろう。

力を取り戻すと言った方がいいかな。

「ヒノアラシ、たいあたり」

「ヒノー！」

「ぐおっ!? やめんか！」

「ヒノアラシ、たいあたり」

「ヒノー！」

「ぶべらっ!? ま、待……」

「ヒノアラシ、たいあたり」

「ヒノー！」

「ごおへっ！ わ、分かったから待て！ 言うことを聞くから落ち着け！」

三回繰り返したら従順になったので距離を置く俺たち。

漏湖は仲間になりたそうな目でこちらを見たりしないが……従えることはできるようだ。

ウインドウに出ているからな。

ある程度戦闘経験値を済ませないといけないから仲間にするか迷うけど……。

炎って被ってるしなあ……。

まあいいか。とりあえず仲間にしておこう。要らなくなったら捨てればいいんだし。

「じゃあ、俺のパーティーに加わるということで」

「くっ……まあよかろう……」

漏湖さんはこんなこと言わなさそうだけど無力になったらまあこんなもんかな……さて、今度こそ次の村に向かうとするかあ。